

### 3. 女子が理科を好きになるしかけづくり

株式会社リバネス メディア開発事業部出版制作室室長 磯貝里子

自分が理科を好きになったきっかけを振り返ってみると、それは小学生の頃まで遡ります。男女の双子の姉として生まれた私（と弟）に、父親は本をよく買ってくれました。そのうちの一冊、植物についての学習まんがが、その後の私の進む道を決めたといっても過言ではありません。しかし、弟のほうは、その本に見向きもしませんでした。同じ環境で育ったら、必ず同じものに興味を持つ、というわけではないようです（もちろん、共通で好きなもの、嫌いなものもあります）。現状の統計データを見ても、改めて、男の子のほうが理科に興味を持ちやすいという事実を認めざるを得ません。

では、女の子が理科に興味を持つためには、どんなことが有効なのでしょう。

私の勤める株式会社リバネスは、小・中・高校に出前の実験教室を提供しています。担当の先生にヒアリングしながらつくるカリキュラムは、学校ごとのオーダーメイド。共通しているのは、若手の研究者の卵、理系の大学生・大学院生がスタッフとして学校に出向き、専門知識を伝えたり、実験操作の補助をしたりするだけでなく、自分の研究をわかりやすく、かつ熱意をもって語ることです。学校の先生が実験教室を取り入れる目的はさまざまですが、生徒がスタッフとの会話を通して、理系大学に進んだその先の自分の姿をリアルに想像できるようになることを重要視されています。都内のある女子校では、リバネスの実験教室を毎年実施したことにより、理系選択者が増加

したという実績もあります（現在は実施していません）。この学校では、実験教室の後にはならず、生徒がスタッフに大学や普段の生活の様子を聞くなど密な会話ができるキャリア交流会を実施していました。理系に進むと大学でどんなことができるのか、ということと同じくらい、その世界に行ったら「どんな人がいるのか」「どんな人になれるのか」ということも重要なのかもしれません。

一方で、実験教室では伝えきれないサイエンスを届けようと、高校生向け科学雑誌『someone』を2006年に創刊しました。デザインコンセプトは「女子高生が持ち歩いてははずかしくない可愛さ」。サイエンス誌にはコンピュータグラフィックスが多用されがちですが、あえて手描きのやわらかいイラストを採用しています。そして、インタビュー記事の割合を多くし、研究に携わっている「人」の魅力を書くことを大切にしています。大学生・大学院生向けには、女性の博士号取得者の活躍をインタビュー記事で紹介する書籍『好きになったら博士～博士号の使い方 WOMAN～』も発刊しました。

女の子が憧れるような、理系の素敵な女性をもっとみんなに知ってもらうこと。理系の女性が活躍できる場所を、私たち自身の活動によって作り出すこと。それが、理科が好き、理系に進んでやりたい研究をする、そんな女の子を育てることにつながるのではないかと考えています。

#### 磯貝里子氏プロフィール



株式会社リバネス メディア開発事業部 出版制作室 室長。

県立高校の普通科を卒業後、東洋大学生命科学部に入学。植物の組織培養と有用成分生産に関する研究を行う。同大学大学院の博士前期課程および後期課程を修了。博士（生命科学）。博士後期課程2年の秋にリバネスでインターンを開始、高校生向け科学雑誌『someone』の制作や出前実験教室の運営に携わる。入社後は、学校向け教材開発、人材育成事業等も行い、現在は主に、大学広報・ブランディングの支援や、書籍・冊子制作を担当。出版事業の企画から流通までを統括。